BLACK RED

周防環

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ

【Ｎコード】
Ｎ４９１９Ｓ

【作者名】
周防環

【あらすじ】
黒の少年剣士シフォン・アルステッドはとある森で野宿をしていた。不意に感じた複数の殺気と逃げ惑う少女の気配。渋々駆けつけてみると盗賊に少女が襲われていた。なんとなくピンチに颯爽と登場する正義の味方のように盗賊と少女の間に割って入るシフォンだったが、少女の口から飛び出したのは感謝の言葉ではなく……。
強大な力を隠し持つ黒の少年剣士シフォン・アルステッドと超絶無礼極まりない毒舌赤髪少女カナリア・メイスンが出会ったその時からファンタジーあり、ラブコメあり、バトルありのこのドタバタス

トーリーは始まります。

第一話　黒と赤の奇跡的な……。（前書き）

はじめまして。周防環と申します。
連載小説として書き続けていけるよう頑張りますのでよろしくお願い致します。タイトルの「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ」は物語とはあんまり関係ないんですが主人公とヒロインのイメージカラーが黒と赤なのでそれを引用させていただきました。捻りがなにもないのが悔やまれます（泣）内容はまだまだ拙いですが、よくなるように努力していきます！では、「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ　第一話　黒と赤の奇跡的な……。」をどうぞ♪

第一話　黒と赤の奇跡的な……。

静寂が支配する晦冥の中に、焚き火の中で燃え盛る薪の爆ぜる音だけがかすかに響く。

辺りには獣の息づく気配は無く、ただただ宵の闇が広がっている。

そんな冥暗な森の中でシフォン・アルステッドは樹にもたれかかり焚き火を前にして寝息をたてていた。

年の頃にして十五歳。未だ幼さが残る顔立ち。漆黒の黒髪が夜風に吹かれては柳のようになびいている。まだ少年といっても相違ない外見とは裏腹に、世界を旅してつちかわれた彼の感覚は鋭敏だった。並みの剣士なら見逃してしまうような微弱な気配。生き物が生き物を仕留めようとする際に発する気配。すなわち、殺気。

たとえ眠っていようともシフォンの研ぎ澄まされた感覚は強制的に彼を夢境から現実へと引き戻す。

（十三か。距離はそれほど遠くない。この気配は、人？　気配の移動速度からすると走っているみたいだ）

よっ、という掛け声と共に起き上がり気配がした方へ再度意識を集中し探ってみる。十三の気配のうち十二が殺気を放っているが残るひとつは妙に気配が弱々しい。恐らくは逃走中。恐らくは女性、それも少女のようだ。

これが今日この日ではなく、なんでもない日常をいつものように過ごしたシフォンであれば、彼は首を突っ込もうとは思わなかっただろう。

しかし、シフォンはそばに立てかけておいた長さの違う二本の剣をそれぞれ腰の剣帯に差すと、ため息をついて走り出した。

＋＋＋

「はぁ、はぁ……」
「どこいった！？　まだ遠くには行ってねえっ、探せっ！！」

カナリア・メイスンは今日という日を、自分の性格と不幸さをこんなにも呪ったことはない。
なぜこんな状況に陥ったのか、不幸過ぎて思い出したくもなかった。
彼女は旅の道中、次の街までは街道を歩くより森を突っ切った方が早いという情報を行商人から教えてもらった。路銀が底を尽きかけていたので近道があるならと森に足を踏み入れたのが運の尽き。地図を持たない彼女は当然のごとく遭難し広大な森を一人彷徨うはめになった。
それだけならまだよかったのだが、不幸というやつはそこかしこに転がっているものである。
陽が落ちて薄暗くなった森の中でやっとの思いで灯りを見つけ、助けてもらおうと近づいてみるとそこは盗賊さんたちがにぎやかに宴を催している真っ最中。気づかれる前にお暇しようと後ろに一歩下がった瞬間、運悪くそこに落ちていた小枝を踏み折って、運悪く近くで小便をしていた盗賊の一人に見つかり、あとはご想像の通り現在に至る。

「だ、だれかっ！！　あっ！！」

森の中を駆け回ることかれこれ数十分。所詮慣れない獣道を走る少女の脚と、森を縄張りにしている盗賊達の脚とでは追い詰められるのは時間の問題だった。その上ここは夜の森、叫んでも誰も来るわけがない。カナリアにとって最悪の、絶望的状況。
その上追い討ちをかけるように地面から飛び出していた木の根に足を引っ掛け転倒し、その際に捻ったのか痛みで立ち上がることさ

えままならなくなってしまった。

「うぅ……」

「見つけたぞ～、あんま手間かけさせんじゃねえよ」

カナリアは顔面蒼白になった。

振り返ると、すぐ背後には典型的な盗賊のお頭っぽいスキンヘッドのごつい男が大振りのシミターなんぞを構えてニタニタと気味の悪い笑顔を浮かべている。

カナリアの脳裏に今後自分がどうなるのかがよぎる。

（どうしよう……こんなか弱くて可愛い娘ならきっと散々慰み者にされた挙句どこぞの奴隷商人にでも売り飛ばされちゃうに決まってる。あっ、でもお金持ちでイケメンの貴族様に買われて見初められ結婚って可能性もあるわね。や～ん、そうなったらどうしよう～、ウチ困るぅ～♪）

けっこう余裕のようだ。

彼女はいついかなる状況においても甘美な空想と妄想を忘れない生粋のロマンチストなのだっ！！

「おいこら、お嬢ちゃん」

「なによテンプレハゲゴリラ。ゴリラは大人しく檻の中でバナナでもかじってなさい」

「て、てめえ、言いにくいことをズバズバと……」

「なによ顔赤くしちゃって、タコみたい。さしずめタコゴリラってとこかしら」

そのやり取りをみていた盗賊団員がざわざわと騒ぎ出す。

「お、おい。今あの娘、タコって言ったか？」
「言った言った、言っちまった。団長にタコは禁句だぜ」
「しかもその前にゴリラとハゲとテンプレも言ったよな……団長の禁句ワースト5のうち四つを口にしちまった」
「あとひとつ、チェ〇ーだけは言っちゃなんねえ。言ったが最後……ブチ切れモード突入だからなあ」
「バ、バカッ！！　お前が言ってどーすんだっ！！」

団員がゆっくりと団長の方に振り向き状況を確認。結果、時すでに遅し。

「ヌオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！　殺す殺すっ！！　ぶち殺すぅっ！！」

団長の顔は怒りでゆでだこのごとく赤く染まり、今にも頭のてっぺんから湯気を吐き出しそうだ。

「ちょ、ちょっと！！　チェ〇ーはウチじゃないわよチェ〇ーは。つーか、その歳でチェ〇ーじゃもう望みないわね。ご愁傷様」
「これ以上俺を辱めないでくれえーっ！！　もう死ねえええええええええいっ！！」

大振りのシミターを振りかぶって鬼の形相で涙を流しながらカナリアに迫る団長。
カナリア絶体絶命のピーンチッ！！
その時、
「あっはっはっはっはっ！！」

カナリアの樹上から笑い声が落ちてきた。

「よっと」

樹上から身軽に飛び降りると少年は華麗に着地を決めた。言うまでもなくシフォンである。

服の埃を払い落とし、シフォンはカナリアに向かって手を差し伸べる。暗闇の中、気配のみを頼りに追走してきたのである。

「お怪我はありませんか、お嬢さん」

まるで童話に出てくる白馬の王子のごとく登場したシフォン。内心では会心の登場シーンの出来に満足していた。この奇跡的な出会いにこの赤い髪の少女もイチコロだぜ♪などと思っていると、彼女の手が伸びてきてシフォンの手を……取らずになぜだか胸倉を掴まれた。彼女の視線は鋭く、危機的状況を間一髪で救った恩人に対する眼差しにはとても見えない。

シフォンが軽く困惑していると、

「気安くさわんないで、この黒モヤシ」

一蹴された。世の中そんなに甘くないらしい。シフォンはまだ少女には触れていないというのにこの仕打ち。どうやら神はシフォンを見放したようだ。

辺りを一陣の風が通り過ぎていく。その後に残されたのは呆然とたたずむ少年と盗賊団、横柄な少女、沈黙と冷めた空気と黒モヤシだけだった。

第一話　黒と赤の奇跡的な……。（後書き）

第一話を読んで頂きましてありがとうございました。
まだまだ物語の序盤ということもあり意味のわからない部分もあると思いますが、今後回収していけるよう努力しますのでこれからもよろしくお願い致します。
では、また次回お会いできることを楽しみにしています。

第二話　森の中での壮絶なる……。（前書き）

「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ」第二話です。
ついに盗賊団とのバトルに入りますが、先に言っておきます。グダグダなバトル展開です（笑）シフォンとカナリアが出会ってからいいところのなかったシフォンはこの話で主人公としてのかっこよさを発揮できるのか？それとも結局かっこ悪いまま終わるのか……それは読んでからのお楽しみということで。ちなみにこの話で主人公シフォンの素性が若干明かされます。では、「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ　第二話　森の中での壮絶なる……。」をどうぞお楽しみください♪

第二話　森の中での壮絶なる……。

シフォン・アルステッドはその日たまたま不機嫌だった。
次の村に到着する前に陽が落ちてしまったために野宿する場所を探そうと森に入り、その数分後に有り金全部を入れた財布を落としてしまった。仕方なくこのまま村まで歩こうかと思ったが道に迷い森から出ることもできなくなった。とりあえず腹が減ったので狩猟か魚でも取ろうかと歩き回ってみたが動物の姿も川すらも見当たらない。陽も完全に落ち、今日は我慢しようとふて寝し始めたところでこの騒ぎである。
空腹で腹の虫は鳴りっぱなし、金も水も食料もない。その上睡眠まで邪魔されたとなっては誰だって盗賊相手に憂さ晴らししてやろうと思うのは自然の成り行きだと、シフォンは思った。
そんな八つ当たり的事情で彼は登場したのだった。

＋＋＋

「さあ盗賊団よ、僕が相手だっ！！」
「「「無かったことにする気だ！！　前回の黒モヤシのくだりを丸ごと無かったことにする気だっ！！」」」
「うるさいっ！！　あんなかっこ悪い登場シーンが存在していいはずがない！！　忘れろ今すぐに！！なんなら俺が剣で忘れさせてやろうか、あぁ！？」
「あのガキ、盗賊より盗賊っぽいよっ！！　向いてるよ盗賊っ！！
団長ーっ、いい加減目覚ましてください！！　俺たちガキにめちゃくちゃなめられてますっ！！」

シフォンは内心ため息をついていた。さっきからゴミを見るような目でシフォンをにらみつけるこの少女を助ける気もとっくに失せ

ていたし、なによりこの少女を助けたところで腹が膨れるわけでも、財布が戻ってくるわけでもないからだ。むしろ余計に腹は減るし、満腹になるのはストレスだけだとわかりきってるし。
今度は見てわかるようにカナリアを見ながら堂々とシフォンはため息をついた。

「ちょっとあんたやる気あんの！？　なにウチを見ながら堂々とため息ついてんのよ、つーか呼びもしないのに出てきたんだから早く助けなさいよ、このグズ！！」
（さっき「だ、だれかっ！！」とか言ってなかったか！？）
「トロいわねー、なにしてんのよ。この状況で出てきたんならそこそこ腕に自信あんでしょ？　強そうには全っ然っ！！　見えないけど、まあ助けられてあげるわ」
「あのさー、ここはもうちょっとこう盛り上がる演出をお互いが意識して雰囲気作りをするべき場面なんじゃないかな……ストーリー的に？」
「あんたの価値観なんて関係ないわね、そんなものウチがちり紙交換にでも出してやるわ」
「おいおい！！　俺の価値観を勝手にちり紙と交換すんなよ！！」
「なら洗剤ね、二個よ」
「う～ん、二個かあ。もう一声！！」

盗賊団は2人からすっかり忘れられていた。自分たちを無視するどころか存在すらも消されてしまったかのような二人のやり取りがその後数分間続き、呆けていたハゲ頭がやっとの思いで現実世界への帰還を果たした頃にはシフォンの価値観は洗剤三個とちり紙二束、ろうそく四本とマッチ一箱というくだらなくも壮絶な交渉が終了したところだった。その証拠に二人とも肩で息をしている。

「あんたなかなかやるわね、ウチをここまで苦戦させたのはあんた

で529人目よ」
「意外と多いなっ！！　ふっ君もね、俺をここまで消耗させたやつは久しぶりだよ」
「ウチとあんた、いいライバルになれるかもね」
「そう、かもな」

すがすがしいまでの達成感のある表情で握手を交わすシフォンとカナリア。死闘が決着し、新たに生まれた友情をお互いは確認し合ったのだった。

「ってちょっと待てえっ！！　なにクライマックスみたいな雰囲気出してんのっ！？　言っとくけど俺たちとお前たちが出会ってからまだなにも進んでないからね！？　1センチも物語りは進んでないからねっ！？　つーかなにそのやりきった感マックスな表情！！ムカつくんだけどっ！！」

もうグダグダな展開であった。叫んだ団長の目じりにはうっすらと涙がたまっているほどだ。

「あっ、まだ居たんだ。じゃあ早く戦おうよ」
「お前らを待ってたんだろうがっ！？もういい、おいっ！！　お前らやっちまえ！！」
「まったく、三流悪党みたいなセリフを吐くなよ。このテンプレハゲゴリラ」
「同じセリフを二度言うんじゃねえっ！！」

やっと開戦であった。
まっさきに突っ込んできたのは団長。手に持った大振りのシミターをシフォンに向かって大上段から振り下ろす。シフォンはその一刀をひらりとかわしカナリアが巻き添えにならない場所まで距離を

取る。
　子供になめられたままでは盗賊のプライドが許さないといわんばかりに、シフォンを中心として周りを囲むように武器を携えた盗賊達が殺気を撒き散らしながらじりじりと近づいてくる。自分の持つ武器の間合いにシフォンが入ると盗賊達は次々と剣やら槍やらで切りつけてくるが、シフォンはその全てをギリギリ紙一重のタイミングでかわしていく。
　何度回避したかわからないが、いい加減よけ続けるのもめんどくさくなってきた矢先、シフォンを囲んでいる盗賊達のさらに奥の茂みのほうでポツポツとオレンジ色の明かりが灯っていくのをシフォンは見た。どうやらこいつらもバカではないらしい。円のように囲むことで盗賊達自体をシフォンの目をごまかす障害物とし、本命の攻撃である火炎系攻撃魔法を気づかせない戦法のようだ。

「へえ、仲間に魔術師もいるんだ。ちょっと驚いたよ、あの様子だとフレアボムってところかな？」
「今さら気づいてももう遅えっ！！　死ねやクソガキッ！！」

　団長の合図と共に団員は飛び退き、計四発の火炎の塊が茂みからシフォンに向かって撃ちだされる。
　フレアボムは着弾した火炎が炸裂し対象を焼き尽くす魔法で、効果範囲は狭いがそれを補って余りある威力を持つ。それが四発被弾した場合、まず命はない。
　四つの死の光が唸りを上げながらシフォンに迫る。
　シフォンは腰の剣帯に差した二本の剣のうち、短いほうの剣の柄を握り裂帛の気合と共に引き抜いて、

「はぁっ！！」

　一閃。

四発のフレアボムを一刀のもとに斬り消した。

「なっ！？」

シフォンが抜いた剣は刀身が漆黒。両刃が普通である市販の剣に対し片刃。若干の反りがあり、魔法がエンチャントされている証でもある淡い光を放っている。

「ねえ、まだやる？」

「そっそそそそ、その刀っ！！」

「ん？」

「剣士同盟五強の一角でありA級ライセンス所持者が持つって噂の……もしや、あんた……」

「あれ、ばれちった？」

舌を出して？やっちまった？を表現するシフォンだが、ばらすために抜いたのだから当然の成り行きである。

シフォンが持つ刀という武器は剣と違って扱いが非常に難しいとされている。鋭く研がれた刃は斬れば斬るほどこぼれていくし、一本を作るのに時間とお金がかかりすぎる。技術を習得するだけでも何年もの厳しい修練が必要で完全に体得できる者は極僅かしかいない。そんな刀技を自在に操り、固定化の魔法によって切れ味を永久的に失うことなく維持できる刀を使う剣士は数少ない。

「くくくっ黒の剣士っ、ア、アアア、アルステッドォッ！？」

淡い光に包まれた刀を見た盗賊団の団長はようやく自分が相手にしている少年が、剣士同盟と呼ばれる戦士のみで構成されたビッグギルドを代表する五人のうちの一人だと気づく。強者達の集まる剣士同盟の中でそのトップということはまさに最強の称号も同然。そ

の力はまさに一騎当千。そんじょそこらのしがない盗賊団に太刀打ちできる武力も精神力もあるはずがなかった。
突然の素性発覚に団員たちにざわめきが起こる。

「アルステッドっていやあ、北の地で暴れまわる竜を剣一本で斬り倒したって噂の！？」
「俺も聞いたことある、どんな屈強な戦士が束で挑んでも倒せなかった西方の魔獣。その雷獣クシャナダを単身で倒したとか……」
「俺もいろいろ人外だって噂聞いてる！！」
「俺もっ！！」
「俺もだっ！！」
「そ、そんな化けもん相手にできるわけがねえっ！！　俺は抜けるっ！！」
「俺も抜けるっ！！」
「俺もだっ！！　逃げろっ！！」

盗賊団員は全員が戦意喪失。一人をその場に残して次々と逃げ散っていった。残されたのはもちろん、団長である。
シフォンの経験上たいがいの相手は素性を知ると団員たちのように一目散に逃げていくのだが、さすが盗賊達をまとめていたたけのことはあるというべきか、それともただのバカなのか。団長は恐怖で内股になり、さらに情けないほどのへっぴり腰で剣を構えている。
実力の一端を見せても剣を構えたまま微動だにしない団長を見て、シフォンはめんどくささを通り越していい加減イラついてきた。

「貴様じゃ俺には勝てん。死にたくないならば、去れっ！！」

殺気放出とマジ顔と少しかっこつけた言葉での恫喝。
しかし、団長は動かない。やつには恐怖心はないのかと疑いたくなる。若干うつむいているせいで表情が見えないのがまた不気味だ

った。
　しかしそこに足の痛みを堪えながらカナリアが恐る恐る近づく。いきなり斬りかかってくる可能性も考慮して、いつでも飛び出せる体勢をとるシフォン。緊張が張り詰める。

「……」

　訝しげな目で団長を観察するカナリアだったが、次の瞬間なにを思ったのかカナリアは団長のハゲ頭をバシバシ叩き始めた。

「お、おいぃぃっ！！　何してんだお前ぇっ！！」

　しかし、応答がない。よく見るとかなり強く叩いたのか、団長の脳天にはカナリアの手形が真っ赤になって残っていた。

「こいつさ、ビビッて気絶してるみたいよ」
「……」
「どうする？　とりあえず埋めとく？」
「……額に肉って書いといて」
「あんた、ベタね」
「……」

　なんともいえないグダグダ感と共に、盗賊団との戦いは額の肉とダメ出しをもって終了を迎えた。

第二話　森の中での壮絶なる……。（後書き）

結局こうなってしまいました（笑）
次回はシフォンとカナリアが行動を共にすることになります。そしてカナリアの過去が少し描かれる（かもしれません）！！改めて読むと本当に自分の文章力の無さが恨めしいです（泣）今後良くなっていく事を祈りながら、次回の三話でお会いしましょう♪

第三話　少女の過去は……。（前書き）

「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ」第三話です。
書いててつくづく思いました。人の感情を文章で表現するって本当に難しいですね（汗）第三話を書くにあたりストーリーの展開とキャラクターの感情を合わせて進めていくことの難しさを知ることができました。さて、この三話ですが、ヒロインである赤毛の少女カナリアの過去にちょこっと触れています。全部は明らかになっていませんが、それは今後徐々にと言うことで♪
では、「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ　第三話　少女の過去は……。」どうぞお楽しみください。

第三話　少女の過去は……。

「ぷっ、ふふっ、ぶふっ！　も、もう、だめ……あはははははははははっ！！」

焚き火の中で弾ける薪の音と猛禽類の鳴き声しかなかった夜の森の中でカナリア・メイスンは大笑いした。

盗賊団との壮絶な（？）戦闘からこれこれ数時間が経過していた。

笑いのネタはもちろん無様に気絶した相手にマジ顔で去れと恫喝したシフォンの滑稽な姿。助けた相手にここまでコケにされる正義の味方も珍しい。普通なら感謝された後にキスのひとつでもしてくれてかまわない状況である。

シフォンは恥ずかしさと情けなさで泣きそうだった。いくら腹が減って普段の冷静さを失っていたからといってあんな無様な姿で気絶する三流悪役にマジ顔で恫喝なんて恥もいいところである。

しかしやってしまったものは仕方ない。この仕打ちも甘んじて受けようとも思ったが、少女の笑い方は常軌を逸していた。なんせ大口を開けてかれこれ十分以上も大笑いしているのである。これでは恥ずかしさとこの仕打ちでは精神が耐えられるはずもない。

「ひぃ、ひぃ、く、苦しいぃ～、はぁはぁ……あぁ～、まああれよ。一応お礼は言っとくわ。助けてくれてあ、ありがと……あ、あはははははっ！！」

カナリアは改めてシフォンに感謝するが、この大笑いの最中では感謝も快く受け取れない。というよりも不愉快極まりない。本当にこの少女はお礼を言う気があるのかと疑問すら浮かぶ。

「はぁはぁ……にしてもあんた強いんだね～。なんだっけ？　チェ

ロの絃師だっけ？」
「俺は音楽家かっ！？　なんだ、チェロの絃師って」
「冗談よ冗談。黒の剣士でしょ？　けどあんたがかの有名な剣士同盟五強の一角とは思わなかったわ」
「ふんっ」

あそこまでバカにされた挙句、さっきまで散々笑われたシフォンは完全にすねていた。最強の一人といってもシフォンはまだ子供なのだ。あそこまで笑われたらすねるのも無理はない。というか誰でもすねるでしょ、あの仕打ちは。

「まぁそんなことはどうでもいいわ。あんたさ、ウチの護衛になってよ」

どうやらこの少女の前では最強の称号すらも？そんなこと？で片付けられてしまうようだ。

「やだ」
「よし決まり！！　じゃあさっそく今日からウチを守ってよね。とりあえず」
「俺の意思はガン無視ですかっ！？」
「ウチの護衛が終わるまで睡眠は禁止ね。それと」
「鬼かっ！？」
「ウチに危険が及んだら盾になって死んでね♪　あっそうだ」
「悪魔かっ！？」
「あんたの荷物は売って今後の路銀にしましょう♪」
「魔王だっ！！」
「なによ～、なんにもできないの？　ホント使えないわねこの黒シメジ」
「だから護衛なんか引き受けないって言ってるだろっ！？　しかも

黒モヤシから黒シメジにレベル上がってるし」
「気に入った？」
「気に入るかっ！！」

最強の剣士も形無しの強さを持つ少女カナリア・メイスン。この勝負は後手に回ったシフォンの乾杯だった。
このまま会話を続けても腹が減るだけだと直感したシフォンは早々に切り上げて寝てしまおうと思い、皮袋から毛布を取り出す。
しかし、

「ちょっと！！　まだ話し終わってないでしょっ！？」

この少女はシフォンの睡眠を本気で禁止するつもりのようだ。
毛布をかぶったシフォンに馬乗りになって拳を繰り出す。それがみぞおちの絶妙なポイントに直撃し、シフォンは一瞬呼吸困難に陥った。

（こいつ俺を殺す気かっ！？　我慢だ俺、頑張れ俺っ！！）
「起きろ起きろ起きろぉーっ！！」

遠慮のない打撃が急所にピンポイントヒットしていく。

「ぐー、ぐー」
「あーそう。そっちがその気ならこっちにも考えがあるわ、覚えてなさい」

そう言ってカナリアも毛布を取り出して眠りに入る。
打撃の嵐が収まった後、シフォンは直撃した部位をさすりながら？こいつ、俺が助けなくても盗賊団壊滅できたんじゃないかな？としみじみ思う。

（まぁ明日になればさすがにあきらめるだろ）

この時点ではシフォンはまだカナリアという少女の恐ろしさについて何もわかっていなかった。翌日、嫌というほど彼女の怖さを知ることになろうとは、この時のシフォンには知る由もなかった。

＋＋＋

陽の光が大地を煌々と照らす晴れた翌日。

シフォンは目の下にクマを作って疲れた表情で街道を歩いていた。隣には携帯食を無邪気にパクついているカナリアが足取り軽く歩いてる。

昨夜、シフォンは眠りに入ったあと一時間おきに実にさまざまな手段を持ってカナリアに叩き起こされ、ついには十分な睡眠をとることもできずに朝を迎えてしまったのだった。完全に寝不足である。

「足ふらついてるけど大丈夫なの？　睡眠は健康の基本でしょ、これで最強の剣士だなんて笑わせるわね」

「あははは……」

カナリアも同じ条件のはずなのになぜ寝不足にならないのかまったくもって謎である。

？お前のせいだろ？と言いたかったが言ったら最後、今度はどんな報復を受けるかわかったもんじゃない。このカナリアという少女、セミロングの赤い髪、赤い瞳に眼鏡をかけていて見た目は非常に可愛い。美少女と言っても過言ではない。しかし、相手を射殺す暗殺者のような目つきとハチャメチャな言動がその全てを跡形もなく叩き壊している。

（いったいどんな生活をしてきたらこんなとんでもない性格に育つんだ？）

はなはだ疑問である。

「なんか失礼なこと考えてる顔ね」

「か、考えてませんボスっ！！」

すでに主従関係まで完成されつつあることに、シフォンはまだ気づいていないのであった。

「ふん、まっいいわ。ところでどうして街道を行くの？　森を抜けたほうが早いんでしょ？」

「ん～まぁね。でも、森はいろいろと危ないから、いろんな意味で」

「盗賊だの魔物だのが出たってあんたが倒すんだから問題ないでしょ、ウチはいつでも逃げる準備万端だし」

「逃げんのかよっ」

「当然でしょ、ウチは戦士じゃないんだから。で、さっきの質問の答えは？」

「いや、まぁそうだけどさ……森の中は歩きにくいでしょ……その足じゃ、さ」

「なっ！？」

シフォンは気づいていた。昨夜、盗賊から逃げる途中で捻ってしまったカナリアの足の怪我が治りきっていないことを。

「気づかせないように歩いてるようだけど、俺にはバレバレ。かなり痛いはずだよ」

「～～～～～っ！！」

「まったく、痛いなら痛いって言えばいいのに。我慢したっていい

ことないよ、ほら」
「っ！？」

シフォンはしゃがんでカナリアに背を向けた。背に乗れという意思表示。
だが、カナリアはうつむいたまま何も言わない。肩が震えていた。

「遠慮すんなって、君は女の子なんだからこんなときくらい甘えていいんだ。あれ？　そういえばお互いまだ名乗ってもいないや、昨日からずっと一緒なのに」
「ウチに……しないで」
「ん？　なに？　よく聞こえないよ」
「ウチに……優…く……しないで」
「え？」
「ウチに優しくしないでっ！！」

突然だった。
カナリヤはいつもとは違う、今まで抑えていた感情が爆発したかのように怒声を発し、シフォンをにらみつけた。敵意だけではなく、悲しみを含んだ瞳で。

「ど、どうしたの？」
「なにが女の子だからよ……なにが甘えていいよ……あんたのその偽善者みたいな態度がいちいちカンにさわんのよっ！！　どうせあんたも本心ではめんどくさいとか早くいなくなればいいとか思ってんでしょっ！！　ウチは故郷を出なきゃいけなくなったときからあんたみたいな偽善者野郎共にいいように使われてきた……みんな口では綺麗事ばかり言ってた。可哀想に、もう大丈夫だよ、最初は信じた……でも信じるたびに裏切られた……だからウチはもう誰も信じない。優しくされたって……ウチには不愉快なだけ」

「……」
「人なんて信じるに値しない……ウチは絶対に信じない。あんたのことだって利用してるだけ、何の感情も持ってない」
「……だからなに？」
「っ！？」
「そんなの俺には関係ないよ、君の都合なんて知ったことじゃない。俺は俺の信じた道を行くし、信じたことをやるだけだ。君が俺の協力を受けたくなかろうが人を信じられなかろうが、俺は君のつらそうな顔なんて見たくないんだ。だからやりたいようにやる」
「……っ」

カナリアが呆けている隙にシフォンは持ち前の身体能力で瞬時に背後に移動しカナリアをお姫様抱っこする。
最初は嫌がって暴れていたカナリアだったが、シフォンの力に抵抗できないとわかると次第に大人しくなり何かを思い出すかのように静かに泣き始めた。
この少女にも人生を変えてしまうような事情があったんだろう、自分と同じように。そう思ってシフォンはあえて何も聞かなかった。いつまで一緒にいるかはわからないが、別に一緒にいたいわけでもないが、もし話すべき時がくるならばそのときに話してくれるだろうと、シフォンは待つことを選んだ。
出会って一日も経っていないのに、どうしてこんな気持ちになるのかシフォン自身にもわからないが、この赤毛の少女を放っておくことはできないと思った。この子には助けが必要だと思った。たとえ邪魔だと、迷惑だと言われようとも。

「あのさ、名前……教えてくんない？」
「……」
「嫌なら、別にいいけどさ」
「……カナリア」

「カナリアか。じゃあカナって呼ぶけど、いい？」
「……好きにすれば、モヤ……シフォン」
今二人の距離は少しだけ、縮まったのかもしれない。

第三話　少女の過去は……。（後書き）

この第三話ではヒロインであるカナリアは過去に人生を変えてしまうような何かがあったということだけ触れています。そして同様に主人公であるシフォンも過去に何かしらの傷を抱えているような、そんな雰囲気が伺えます。今後どのようにそれらが絡み合っていくのかは作者自身にもわかりません（笑）ただ、読んでくださった皆様が少しでも面白かったと思えるような小説にできるよう頑張ります♪

次回の第四話ですが、シフォンとカナリアはようやく村に到着します。でも実はカナリアは……この先は第四話で確認してください♪

では次回の第四話でお会いしましょう。

第四話　白衣のシ者は……。（前書き）

「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ」第四話です。
今回シフォンもカナリアもかなり命懸けです！二人の心境をどこまで正確に文章で描けるかわかりませんが、全力投球で頑張ります♪
新キャラも登場する「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ　第四話　白衣のシ者は……。」をどうぞお楽しみください♪

第四話　白衣のシ者は……。

リリンの村。
この村でしか採取できないとされているリリンの花が唯一の特徴で、治療薬の原料として薬屋や治癒術を使う魔術師などに重宝されている。わざわざ遠くの街や村から花を買い付けに来る商人も多く、どこにでもあるような質素な村にしては街までとはいかないがそれなりに人通りと活気がある。

＋＋＋

二人がリリンの村に着いたのは昼過ぎだった。
カナリアの足は痛みは引いてきたが腫れはまだ引かず、骨に異常がある可能性も捨てきれないのでシフォンは少しでも早く診療所に連れて行きたかった。その上やせ我慢していたときに傷が悪化したらしく、カナリアは自力で歩くことができないほどひどい熱にうなされていた。

「う……うぅ……」
「あと少しで診療所につくからもう少し頑張れ」
「あんたに、言われなくても……わかってるわよ……バカ」
「そんだけ元気があるならまだ大丈夫だな」

幸いなことに診療所は村の入り口付近に建っていた。診療所にしては規模が小さい気もするが文句を言っている暇は一秒たりとも存在しない。今は一刻も早くカナリアを休ませてあげたかった。
しかし、一抹の不安もあった。
「すみませんっ！！　仲間が怪我とひどい熱にうなされているんで

すっ！！」

スライド式の木製扉を開けて大声で医者を呼ぶ。目に付く場所には医者どころか患者もいない。灯りも消えておりシフォンの胸中に不安が押し寄せる。

このご時勢に医者は少ない。

危険を承知で薬の材料を取りに行ったり、難しい調合を行ったり、時間をかけて傷の治療をするよりも治癒術が使える魔術師に高額なお金を払って治療してもらったほうが早いし安全だからだ。だが、こんな田舎の村にまで習得が難しい治癒術の使い手がいるとは思えなかった。せめて医者がいてくれれば治癒術士を連れてくるまでの時間稼ぎにはなると思ったのだが。

誰もいないならここにいても仕方がないと踵を返したとき、奥の扉を開けて白衣姿の女性が出てきた。

「へぇ～、今時医者を頼ろうなんて珍しいやつらもいたもんだ」

口にくわえたタバコがワイルドな印象を与えている。シフォンと同じ黒い髪を後ろで束ね、黒い瞳に眼鏡、身長はシフォンよりも高く、長袖のシャツにズボンにサンダル、白衣が似合う落ち着いた女性だった。

「んっ？」

「この子すごい熱で――」

「坊主、こっちにきな。その子、急いだほうがいい」

シフォンがしゃべり終わる前に白衣の女性は別の扉を開けて、おそらくは診察室なのだろう場所に入っていく。彼女の顔に真剣なものを感じたシフォンはそれ以上何も言わずについていく。

カナリアを診察用のベッドに寝かせ、触診していく。すでにカナ

リアの意識はなく、呼吸も浅い。

「まずいな、傷口からばい菌でも入ったか。坊主、後ろにある棚から三番と七番の数字が書いてある薬を持って来い」

「あ、はい」

最近はパシリにも慣れてきたシフォンであったが、今はそんなことどうでもよかった。

「これでいいですか？」

「よし、こいつで多少落ち着くだろう」

医者の言うとおりカナリアの顔には先ほどまでのつらそうな苦悶の表情はもうなかった。即効性の薬だったらしく、今は安らかな表情で眠っている。

その顔を見て、シフォンは心の底から安堵した。

「あんたこの子の仲間？」

「はい」

「危ないとこだったね、この子足怪我したろ？　そこから緑死菌っていうばい菌が入ったんだね。こいつはかなり厄介な菌でね、今は薬で落ち着いてるが治ったわけじゃない。早いとこちゃんとした薬を投与しないと、この子……死ぬよ」

「なら早く治癒術士を呼ばないとっ」

「待ちなって。言っただろ、？薬を投与しないと？って。この菌の厄介なとこはね、治癒術が効かないとこなんだよ。治療には薬を投与して時間をかけるしかない」

「なら早く薬をっ」

「それがねぇ～、今……無いんだよ。薬の原料になるリリンの花が取れなくてね」

「どういうことですか？」
「リリンの花はこの村の北にある洞窟の奥で取れるんだが、最近そこに強力なモンスターが住み着いたせいで誰も取りに行くことができないんだよ」
「そ、そんな」

希望が絶たれたような気分になった。やっとの思いで診療所に着いた、せっかく医者がいた、なのにまさか薬が無いとは思わなかった。治癒術が効かないならギルドに手配しても何の意味も無い。自分で取りに行くしかない。シフォンはそう思ったが、はたしてカナリアを置いていっていいものだろうか。このまま治療を続けてもらうお金も無い。なにより時間がない。今から出たとしてもタイムリミットまでに戻ってこれるかどうか微妙な時間である。
シフォンが打開策が何かないかと模索していると、白衣の医者は口にくわえていたタバコを吸い込んで肺から吐き出した。

「……あんたさ、ちょっくら洞窟行って取ってきてくれないかい？」
「えっ？」
「だから、あんたが洞窟に行って花を取ってくるんだよ。モンスターぶち殺してさ」
「いや、でも」
「モンスターには村の人たちも困ってるんだよ。できるだろ？　黒の剣士と名高いアルステッドさんならさ」
「……知ってたんですか？」
「いやいや、見ればわかるさ。その腰の刀と肩からさげてる長い刀、長さのまったく違う刀を二本下げてる少年剣士なんてあんたくらいのもんさ」
「……」
「この子のことが心配なんだろ？　優しい子だね。安心しな、あたしが責任もってあんたが帰ってくるまで命つなげておいてあげるか

ら、あんたは自分のできることをしな」
「はい、ありがとうお姉さん」
「エレン、次からはそう呼びな。さぁ早く行きな、タイムリミットは今夜零時、それ以上はいくらあたしでも待てないよ。洞窟はここから北に二時間ほど進んだところにある」

希望が見えた。触っただけでカナリアの病の原因を探り当てたこのエレンという医者なら腕は信用できる。今からすぐに出発すれば夜までには帰ってこれるかもしれない。

「エレンさん。カナを、お願いします」
「あいよ、あんたも気をつけるんだよ。洞窟にいるのは？B級？らしいからね。それとギルドにもよって行きな、行く途中にあるから」
うなずいて、シフォンは診療所から出て行った。
カナリアを助けるために、昨日の誓いを守るために、少年は洞窟を目指す。

第四話　白衣のシ者は……。（後書き）

周防環です。今回も「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ」を読んでくださいましてありがとうございます。今回カナリアの命が危険にさらされているという内容で前作までとは少しだけ違うシリアスな雰囲気漂う内容になりました。まだまだ拙い文章で読みにくいとは思いますが、頑張りますのでよろしくお願い致します。

次回第五話ですが、洞窟へと向かったシフォンはリリンの花を入手してカナリアを救うことができるのか……。ギルドで出会う奇妙な服を着た少年とはいったい……それは次回第五話で明らかになります。では、また次回のお話でお会いしましょう♪

第五話　焦りの先にあるものは……。（前書き）

「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ」第五話です。
この五話でようやくシフォンは洞窟へと歩を進めることになります。
そして今後重要な役を担うキャラが登場します。ですが、どのように絡んでくるのかはまだ秘密です（笑）というか、考えてないだけかも……ま、まぁそれは置いておきましょう。
では、「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ　第五話　焦りの先にあるものは……。」どうぞお楽しみください♪

第五話　焦りの先にあるものは……。

ギルド。

各街や村には、規模はそれぞれで異なるが剣士や魔術師達が仕事を請け負うために訪れるギルドという場所が必ずある。ギルドがない街や村は魔獣に襲われるなどの被害が起こった場合に即座に対処することができない。

またギルドの無い街に剣士や魔術師はほとんど顔を出すことはない。仕事にありつけない場所に行っても意味がないからだ。集落を作る過程でまず最初に決定されるのがギルドの設置であり、集落にとってギルドは最重要施設なのである。

ギルド内には二大派閥と呼ばれる？剣士同盟？？魔術師同盟？があり、新たにギルドのメンバーになったものはまずこのどちらかに所属することになる。

日々飛び込んでくる依頼には実に様々なものがあり、魔獣討伐や要人警護、お使いや草むしりなどＥランクからＡランクまでの五段階に分けられて実力に見合った依頼を請け負うことになっている。そのためギルメンにもトップのＡ級から最も低いＥ級までの五段階のランクがある。自分のランクより高いランクの依頼は受けることができず、業績や実力、昇格試験などでランクはひとつづつ上げていかなければ高ランクの仕事を請け負うことはできない。シフォンが十五歳という若さでＡ級ライセンスを所持しているのはまさに異例だった。

＋＋＋

診療所からギルドまでは足早に歩いて数分の距離だった。

木製の扉を開けると室内は結構広い造りになっていて、正面奥に依頼を受ける窓口が二つ、窓口のそばに様々な依頼書が何十枚と貼

り付けられた依頼ボード、その手前にテーブルとイスが並べられた打ち合わせ用と思われる簡素な休憩スペース、右側には扉がありプレートに食堂と彫ってある。
室内を見渡すと、仕事帰りと思われる剣士と魔術師数人が食堂で賑やかな祝杯を挙げている。休憩スペースでもこれから仕事と思われる剣士二人が打ち合わせを行っていた。

「えぇーっ！！　受けられないってなんでだよ！？」
「いや、だから――――」

とそこで室内を見回していたシフォンは騒いでいる一人の少年に目をとめた。ギルドの受付窓口でギルド員となにかもめているようだ。歳はシフォンと同じくらいか少し上。黒い髪に活力のある瞳、隠しているが見ただけでわかる強者の闘気。見たこともない奇妙な服装をしている。剣も杖も見た感じでは持っているようには見えないので剣士同盟なのか魔術師同盟なのかもわからないが、強い。かなりの手練。

（あいつ……かなり強いな）

少し気になったシフォンだったが首を突っ込むつもりも時間もないのでシフォンは隣の窓口でさっさと受付を済ませてしまおうと思った。
大きめの依頼ボードから洞窟の魔物退治の依頼書を一枚取って窓口に持っていく。窓口で依頼書とライセンスを提出し、受理されるまでの数分間を待てばすぐにでも向かうことができる。時間のないシフォンにしてみればその数分間すら惜しい。
ライセンスに記載された名前を見たギルド員が一瞬目を丸くしてシフォンを見たが、これ以上時間を無駄にしたくなかったので無視することにした。

受理された依頼書を受け取って、一刻も早く花を取りに洞窟へ向かおうとしたシフォンを背後から呼び止める声が聞こえたのはギルドの入り口へ歩き出したその直後だった。

「なあ、あんた！！」

振り返ったシフォンの目に入ったのは、さっきまでギルド員ともめていた変な格好の少年だった。

こんなところで時間を無駄にしている暇はないので、華麗にスルーして再度入り口に向かおうとする。が、少年はすでにシフォンの前にまわり込んで通路をふさいでいた。

「無視すんなって！！　あんたさ、洞窟の魔物を退治しに行くんだろ！？　頼むよ、俺も連れてってくれ」

「はあ？」

「あのギルドの人がさ～、登録のない奴には任せられないって受けさせてくれないんだよ」

「当たり前だろ。ギルドだってどれくらい実力があるのかわからない奴に仕事を任せられるわけがない」

「でも、俺はどうしてもあそこに行かなきゃいけないんだよ。頼むっ！！」

ギルドにはライセンスを持たない人物に仕事をまわすことは絶対にしない。ギルドの面子がかかっているし、実力不足の者に仕事を任せて失敗し、死んでしまおうものならその全責任は仕事を回したギルドに降りかかる。そんなリスクを犯すことなど有り得ない。

しかし、ある条件を満たすことによってのみ無免許の戦士に仕事を回す場合がある。それはB級以上のライセンス所持者とパーティを組むこと。

ギルド員と口論しながらも、この少年はシフォンが依頼を受ける

のを見ていたのだろう。そうでなければこんな申し出をする意味がないからだ。
この少年は遠まわしに言っているのだった、パーティを組んでくれと。
しかし、こんな申し出でパーティを組む奴は普通いない。低ランクの依頼ならいるかもしれないが、この依頼はBランク任務。強いことは雰囲気や身のこなしや闘気でわかるが、即席パーティでは不安が残る。この少年が、万が一死んだとして責任を取ることになってもかまわないが、この依頼が失敗、もしくは長引くだけでもカナリアの命にかかわる。ならば一人で行ったほうがまだいいとシフォンは考えた。不安要素はいらない、と。

「悪いけど、俺にはもたもたしてる時間はないんだ。この依頼にどんな思いがあるのかは知らないけど、今回はあきらめてくれ」
「無理だ！！」
「……おい、いい加減にしてくれないかな。俺は急いでるんだよ、無駄な時間をとらせないでくれよ」
「俺にも事情がある、いいと言うまでここは通さない」
「なら無理にでも通るしかないね」
「へっ、望むところだ」

シフォンは剣の柄に手をかける。
？抜刀術で一瞬のうちに終わらせて早く向かわなきゃ、カナの命にかかわる？シフォンの胸中にはもうそれしかなかった。普段とはまったく違う精神状態。シフォンは自分がいつになく焦っていることに気づいた。

（何をしてるんだ、俺は……）

剣の柄から手を離し、放っていた殺気を消す。

それは剣士になら誰でもわかる行為、すなわち降参を意味していた。

「どうした？　やるんじゃねえの？」
「やめた。こんなの俺らしくない、だからやめた」
「ふ～ん、いいけどよ。じゃあどうやってケリつけるんだ？」
「……君名前は？」
「？　トーマ。鳳凰院刀真だ」
「トーマ、ね」

それだけ聞くと、シフォンは再度窓口に向かいギルド員と何かを話し出した。二言三言話して何かを受け取り戻ってくる。

「パーティの申請受理証、これがあれば一緒に行ける」
「な、なんで？　ケリもついてないのに」
「時間かけたくないんだ、仲間の命がかかってるから」
「……お前」
「なにしてんの、早く行こうよ。こっちには時間がないんだ」
「お、おう。よろしくな！！　……あぁ～、名前聞いたっけ？」
「シフォン・アルステッド。シフォンでいいよ」
「なら俺のことはトーマでいいぜ！！　よろしくなシフォン！！」
「あぁー、はいはい」

嬉々として喜ぶトーマを連れて、シフォンは洞窟に向けて歩き出した。
現在は午後三時。
タイムリミットまで、あと九時間を切っていた。

第五話　焦りの先にあるものは……。（後書き）

周防環です。
「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ　第五話」を読んでくださいましてありがとうございます。この第五話で登場したトーマは今後シフォンの行動に様々な影響を及ぼす（予定の）キャラです。豪快で活発なトーマがどんな騒動を起こしていくのか楽しみにお待ちください♪
さて次回の第六話ですが、シフォンとトーマは道中いろいろとありますが、それらを乗り越えて洞窟に到着します。果たしてトーマが言う魔物を討伐しなければいけない理由とは？それは次回明らかになるかもしれません（笑）
それでは、次は「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ　第六話」でお会いしましょう♪

第六話　相反する二人は……。（前書き）

「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ」第六話です。
この六話で型破りなトーマの実力の一端を感じることができると思います。
では、「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ　第六話　相反する二人は……。」どうぞお楽しみください♪

第六話　相反する二人は……。

リリン洞窟。

リリンの村から北に二時間ほど進んだところにある洞窟で、リリンの花の栽培場。最奥部にある大亀裂によって太陽の光と月の魔力が交互に花へと降り注ぐため魔術的な効果を持ったリリンの花が誕生した。

もともとは自然的にできた洞窟なのだが、今では深奥の大空洞に咲くリリンの花を見つけた村人たちが何年もかけて整備した人工洞窟となっている。内部はかなり深い構造になっているが、通路は広く分岐等も村人たちによって塞がれているため最深部まで到達するのは難しくない。

普段なら洞窟の入り口には魔術による結界が施されているためモンスターが洞窟内に入ることもなく、何の力も持たない村人でも簡単に最深部まで到達することができる。しかし、現在では結界はモンスターによって壊されてしまい、洞窟内はモンスターたちで溢れているため安易に近づくことすらできない状態へと変貌していた。

＋＋＋

シフォンとトーマは洞窟に向けて村の北側にある獣道を歩いていた。

エレンの話だとここから二時間の距離だという話だが、道は整備されているわけでもなく草木を刈って申し訳程度の道を作っているだけである。洞窟までは急勾配が続くうえ足場がかなり悪い。小さい頃から戦場を駆け、地獄ともいえる修行を体験しているシフォンでも呼吸一つ乱さず歩くのは至難の業だった。

それは当然トーマも同じだった。

「なぁ～シフォン～、ちょっと休もうぜ」
「……」
「聞いてんのかよ～、休もうよ～、疲れたよ～、足痛いよ～」

シフォンが感じ取ったトーマの底知れぬ強さの片鱗は勘違いかもしれないと、シフォンは自分の直感を疑わざるを得なかった。
しかしながら、シフォンはトーマの騒々しさに出発して数分で嫌気がさしていた。村を出てからここまでトーマはずっとしゃべりっぱなしである。最初は他愛もない話やヘタクソな歌などを歌っていたのだが、それがだんだん文句に変わってきたのはついさっきからだった。それらを全て無視して歩くシフォンの堪忍袋の緒はすでにブチ切れ寸前である。

（それにしても……）

シフォンはこの少年トーマと出会ってから頭の片隅にずっと引っかかっている違和感があった。それはこの少年が発している奇妙な雰囲気、どこか自分たちとは違うようなそんな不確かだが確かな空気。戦えば強いということは間違いないと思うのだが、どこかしら妙な気配を感じるのは気のせいなのか。考えれば考えるほどわからない。

（何者なんだろう……服装も見たことないし……旅人の可能性は高いけど……う～ん……まぁひとつ言えるのは、確実に不安要素であることは間違いない……っ！？）

しばらくそんなことを考えながら歩いていると、さっきまではなかった空気が辺りに満ちた。
周囲を囲む茂みから、樹木の陰から、樹上から、人のものとは違う濃密な死の気配。獣特有の匂いと殺気。

「トーマっ」
「わかってる、囲まれてるな」

さっきまで文句しか吐き出さなかった口が引き結ばれ、トーマはすでに戦闘体勢をとっている。無手の武術のようだがやはり見たことがない構え。シフォンも腰の剣を抜刀し、左下段に構える。

二人の放つ殺気に気づいたのか、いたるところから獣の唸り声が聞こえてくる。群れのボスと思われる一頭の咆哮を合図にして、姿を隠していた猛獣たちが一斉に飛びかかってきた。

「ローガの群れだ！！　数は十八っ！！」
「了解っ！！」

気配で相手の位置を読むシフォンだが、全周囲から殺気を放つ獣の群れの中では気配が入り乱れ正確に位置を知ることができない。目を頼りに襲い掛かってくるローガを一匹づつ倒していくしかない。

ローガは狼に似た四速歩行の獣のような魔物で、動きが素早く力も強い。またあごの力が異常に強く、噛まれれば次の瞬間にはその部分は無くなっている。しかしローガの厄介なところはそこだけではなく、この魔物は単身での行動がまずない。必ず十匹以上の群れで行動するという点が最大級に問題なのだ。普通の人間相手ならば、だが。

シフォンは左下段に構えた剣を神速ともいえるスピードで左下から右上へと斬り払い、飛びかかってきた二頭を斜めに両断する。仲間がやられて怒ったのか、続いてもう一頭が鋭い牙を剥いてシフォンに接近。斬り払った勢いを殺さずにそのまま体を回転させ、倍化させた勢いのまま下から上へと斬り上げる。一瞬のうちに三頭を斬り捨てたシフォンの実力を感じ取ったのか、ローガ達は慎重に間合いをはかっている。攻めてこない敵をわざわざ待つ必要はない。今

度は剣を右上段に構え地面を蹴る。直近のローガまでは五メートルほどの距離があったがそれを一歩で零にして、突進しながら斬り下ろしさらに一頭を屠った。全部で十八頭いたローガのうちシフォンを囲んでいたのは九頭、すでにその半分を数秒で斬り倒している。残りの半分は勝てないと悟ったのか、四頭目が絶命したとほぼ同時に茂み奥へと逃げていった。

剣についた血を左右に払って落とし鞘に戻すと同じタイミングでトーマの声が響いた。

「どおりゃーっ！！」

大声に反応して振り返ると、トーマの方もすでに四頭を倒し残りは逃げ散っていた。周囲には倒された獣たちが転がっている。そのどれもがとてつもない怪力によって地面に埋まるか、打撃によって骨を砕かれて動かぬ肉塊と化している。

「これ、全部素手でやったのか？　とんでもない馬鹿力だな」
「ふんっ、手応えのねぇ犬っころどもだ」
「けっこう厄介な奴らなんだけどね……」
「ところでシフォンよ～、洞窟ってまだ着かないのぉ～？」

トーマはいろいろな意味で規格外だった。

その後はモンスターとの戦闘も起こらず順調に足を進めることができた。相変わらずトーマは文句を言い続けていたが、洞窟が近づくに連れて徐々に口数は少なくなっていった。今後繰り広げられる戦いの予感を感じ取っているのかもしれない。

そして、

「着いた。ここが、リリン洞窟……」
「こりゃ、なかなか厄介そうだぞ」

入り口に辿り着いた二人は洞窟から漏れ出る異質な空気を感じとって気を引き締めた。
この中にどんな魔物がいるのかはわからないが、リリンの花を持って帰らなきゃいけない理由がシフォンにはある。躊躇している暇はない。

「カナ、必ずリリンの花は持ち帰るよ」
「しゃあ、行くぞっ！！」

シフォンとトーマは漆黒の洞窟内へと足を踏み入れていった。

第六話　相反する二人は……。（後書き）

周防環です。
「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ　第六話」を読んでくださいましてありがとうございます。
やはり仕事が始まってからは執筆も思うように行かず……この第六話で入れようと思っていたトーマの討伐理由が加えられなかったのですが、それは次回に入れることにしました。もし楽しみしていた方がいらっしゃいましたら本当に申し訳ございません。次回はもっとうまく書けるようにがんばります！
さて次回予告ですが、次回は洞窟内に突入します。その途中でのシフォンとトーマは何を語るのか？
それでは、次の「ＢＬＡＣＫ　ＲＥＤ　第七話」でお会いしましょう♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4919s/

BLACK RED

2011年5月23日05時08分発行